

## セッション4 症例報告

### 14. アルコール依存症患者の腹膜透析導入を支援した看護介入に関する一考察

○青木 雅美 (アキヤマミ)<sup>1)</sup>、松本 直子<sup>1)</sup>、鈴木 俊美<sup>1)</sup>、小林 賢次<sup>1)</sup>、小森 美佳<sup>1)</sup>、  
宮城智賀子<sup>1)</sup>、斎藤 彰信<sup>2)</sup>、酒井 謙<sup>2)</sup>

東邦大学医療センター大森病院<sup>1)</sup>、東邦大学 医学部腎臓学講座<sup>2)</sup>

#### 【症例】

50代女性歯科医。中学から飲酒を始め、30代で出産後、育児と嫁姑関係のストレスから飲酒量が増加、さらに夫のDVにより双極性障害となる。1年前より腎機能悪化し、腹膜透析（以下PD）用カテーテル挿入の入院時にアルコール依存症と診断された。

出口部作成の為の入院後数日は、集中力・意欲の低下が見られ、外来で指導されたPDの手技も思い出せない状態であった。その後2度の離院や病室での飲酒があり、行動制限等の取り決めを行った。断酒と尿毒症の改善がみられると、本人の意欲や集中力も改善し、約1か月で手技獲得に至った。

#### 【考察】

本症例患者が手技獲得に至った要因として、①入院生活の取り決めを行い、断酒が出来る環境を作った。②断酒のストレスを、本人が希望する買い物や洗濯の時間を設けることで緩和した。③生活スタイルを守れるという理由で自らの意志でPDを選択した為、環境的ストレスや離脱症状にみまわれても意欲的に取り組むことが出来た。④歯科医である事から清潔操作に対する意識が高く、正確な手技を獲得出来た。⑤関わり方や抗精神薬の調整に関してリエゾンチームと連携をとることで、体調や精神状態の変化に対応出来た事等が考えられる。